

フランス語教育における前置詞 *pendant* と 時制の共起についての一考察

——日本語を母語とする学習者の誤用に基づいて——⁽¹⁾

田 原 い ず み

はじめに

本論では日本語を母語または母語レベルで話すフランス語学習者の *pendant* と時制の共起に関する誤用を出発点にし、このタイプの誤用が生じる理由、そしてこの前置詞と時制の組み合わせの正しい理解へどのように学習者を導くべきかという点について考察する。一：ではなぜ日本人学習者が *pendant* と半過去の共起という本来は正しくない組み合わせをする傾向にあるのかということ考察しつつ問題提起をしたい。二：ではその原因が学習者によって日本語の動詞のテイタ形とフランス語の半過去の特性が同等だと捉えられることにあると考え、二：一：では日本語のテ

フランス語教育における前置詞 *pendant* と時制の共起についての一考察

フランス語教育における前置詞 pendant と時制の共起についての一考察

イタ形について、二・二ではフランス語の半過去について、それぞれの特性を、さらに、学習者が理解すべきテイタ形と半過去が同様の特性を持たない点を明らかにしてゆく。三では、二・二での考察を踏まえて、「pendant + 時制」の組み合わせの正しい理解方法、さらには、学習者に混乱を与えない教授法について考察する。

一．問題提起

フランス語の前置詞 pendant については、日本語を母語とするまたは母語レベルで話す学習者がその意味を把握するのに特に苦労するということは一般的にはないと思われる。日本語の「～の間、～間／＼の間、～間に」という期間を表す表現と同等であると理解すれば、読解の際などに誤解が起こることは少ない。また、特に多義的に見える前置詞でもないため、フランス語初習者にとっても、一度学習し、例文を見ておけば、把握できたように思えるであろう。つまり、pendant 自体は日本語を母語とする学習者に意味の把握のうえでは困難を与えるものではないと言えるだろう。

しかし、日本語を母語とする学習者の pendant を用いた実際の発話を見ると、pendant と共に用いられる時制を視野に入れることで、この前置詞の理解がそう容易なものではないことが分かる。日本語を母語とする学習者のフランス語における口頭の発話のコーパスである CLJAF では、次のような pendant と半過去が同一の発話で用いられるという誤用が起こることがわかる。

(1) (...) * parce que j'habitais au Japon pendant un an (...) (CLJAF)

(1) にある半過去を (2) のように複合過去に置き換えると文法的になる。

(2) (...) parce que j'ai habité au Japon pendant un an (...)

このことから、日本語を母語とする学習者にとっては、pendant という前置詞の理解ではなく、pendant と共起する時制に関して問題が起こる傾向があることが分かる。ここには日本語の時間の表現とフランス語の時制の相違(または類似)の理解不足があると思われる。(1)、(2)の例文で表されている出来事は「私が1年間日本に住んだ」ということであるが、(1)のフランス語の発話を発する際に学習者が思い浮かべた日本語の文は、タ形を用いた「1年間日本に住んだ」ではなく、テイタ形を用いた「1年間日本に住んでいた」というものであった可能性が高いのではないだろうか。日本語では、「1年間」のような「時間の表現+間(または、の間)」は、時間の流れの中に始点と終点を設け、その間にある期間を区切って提示するという役割を担っている。これはフランス語の pendant と同様であるが、pendant が普通話し言葉で共起するのは半過去ではなく複合過去である。それは、半過去という時制が現在時点より以前のある時点において展開中の行為や状態を、その始点も終点も示すことなく提示するという特性を持ち、それに反する特性を持つ pendant と共起させることが難しいからであると言える。ここから、pendant は半過去が示す「過去のある時点において展開中の出来事」に始点と終点を強制的に与え、ある区切られた時期とし

て提示できる機能は持たないことも明らかにになる。逆の考え方では、半過去の表す始点も終点も明示しない出来事や状態の未完了のあり方は pendant のような時間軸上のある期間を区切る性質を持つ前置詞を共起させても、強制的に出来事や状態の完了した姿を示すようには決してならないということである。ここでは本題ではないので、議論を広げることとはしないが、この点については、「過去のある時点」に視点を導入し、その視点から展開中の出来事を捉えるという特性は半過去にとつて本質的なものであるので、pendant を始めとする他の要素はこの本質をキャンセルすることができないと考える。以上のような特性を持つ半過去と、一見それに類似しているように見える日本語の動詞のテイタ形を同等のものともみなしてしまうという問題が日本語を母語とする学習者が起こす半過去と pendant の共起という誤用の原因ではないだろうか。別の見方をすると、pendant の同等表現「(の)間」と動詞のテイタ形が共起可能という点が学習者に混乱を与えていると考えられる。続く二では、この問題の根本を明らかにするために、日本語のテイタ形そしてフランス語の半過去の本質と、日本語を母語としてまたは母語レベルで話す学習者による半過去の理解について論じてゆく。

二. 日本語のテイタ形とフランス語の半過去

上で pendant と半過去の共起の誤用は学習者がフランス語の半過去を日本語のテイタ形と同等だと考えた結果であると述べたが、半過去をテイタ形と同様の特性を持つものであると理解しても、フランス語における発話の際に問題が起こることはそう頻繁ではないと思われる。半過去は、過去時制以外の用法もあり、実際は非常に複雑な特性を

持つ時制であることは明らかだが、(3)、(4)のような普段よく出会う半過去の発話の大部分に関しては、過去のある時点における継続・展開中の出来事を表すと解釈し、テイタ形を用いて和訳すれば問題がないことが多いからである。

(3) *Quand je suis arrivée chez lui, il cuisinait.*

(私が彼の家に着いた時、彼は料理をしていた。)

(4) *A l'époque, nous allions voir nos grands-parents le dimanche.*

(当時、私たちは毎週日曜日に祖父母に会いに行っていた。)

フランス語文法の教科書や参考書または授業などにおいて、フランス語の半過去の最も一般的な用法が日本語のテイタ形と同等であると説明されることはないと思われるが、⁽³⁾初習者が例文とその和訳を見ながら、半過去を理解しようとする時、半過去を日本語のテイタ形と結びつけて理解することはある程度自然なことだと言えるだろう。ここから考えると、日本語では「く間、くの間」とテイタ形を一緒に用いることは自然に見えることから、学習者がフランス語の *pendant* と半過去を共起させてしまうという誤用が生まれることも驚くことではない。

本論では、日本語を母語とする学習者に、*pendant* という前置詞と半過去の共起が誤用であることを気が付かせるために、フランス語教師がどのような説明をするのが効果的かということを最終的な目的として考えてゆきたい。そのため、まず、二・一では日本語を母語とする学習者が半過去の同等表現とみなすことのある日本語のテイタ形の

フランス語教育における前置詞 *pendant* と時制の共起についての一考察

特性について検討する。

二・一・ 日本語のテイタ形について

二・一・では、上記で見たように、日本語を母語とする学習者が半過去を選ぶ際に頭に浮かべている可能性の高い日本語のテイタ形の特徴について考察する。半過去とテイタ形が必ずしも結びつかないということを理解することが、*pendant* を含む発話における時制の誤用を防ぐと考える。また、フランス語の過去時制としての半過去を学習する際に、日本語を母語とする学習者が日本語においてその同等物となり得る表現の特性をある程度意識することが役立つと考える。

フランス語の初習者がまず学習する半過去の用法は (3)、(4) に見られるような「過去における継続中の状態・出来事」または「過去において繰り返された状態や出来事」を表す用法であることが多く、他の用法はより学習が進んだ段階で導入されることが多いことから、同等の用法を持つと考えられる日本語のテイタ形と自然に結びつけるという現象が起こると考えられる。しかし、フランス語の半過去と同様、日本語のテイタ形は様々な用法を持っている。

現代日本語の時間表現のアスペクト・テンス体系を論じた重要な研究である工藤 (1995) は、下に挙げる表が示すように、テイタ形 (工藤は「シテイル」と呼ぶ) の基本的アスペクト・テンス体系は「継続相・過去」であるとする。

		アスペクト	
テンス	完成相	継続相	
非過去	スル	シテイル	
過去	シタ	シテイタ	

(工藤 1995: 36)

この表にあるテイタ形の基本的な意味(継続相・過去)は(3)の例文に示されているものである。さらに、工藤(1995)はアスペクト形式は拡大し、多義的になり、基本的意味の他に派生的意味が成立するとし、テイタ(テイル)形のアスペクト形式の派生的意味には「パーフェクト性」、「反復性」、「単なる状態」を認めている。

「パーフェクト性」は、「継続性」とは異なり、(後続時点における、それ以前に成立した運動の効力の現存)を表すものである(工藤 1995: 38)と説明されており、テイタ形のパーフェクト性を表す例として(5)が挙げられている。

(5) 病院にかけつけた時、父は既に30分前に死んでいた。(工藤 1995: 38)

また、「反復性」については、その例として(6)が挙げられており、「個別的・具体的な時間における運動の現象化(アクチュアル化)を捉える(継続性)と異なり、幅広い期間において繰り返し起こる、ポテンシャルな運動を捉えるものである」(工藤 1995: 38)と述べられている。

フランス語教育における前置詞 *pendant* と時制の共起についての一考察

フランス語教育における前置詞 pendant と時制の共起についての一考察

(6) あの頃は、よく、人が結核で死んでいた。(工藤 1995 : 38)

最後に、(7) に表されている「(単なる状態) は、もはや時間の中での展開性を問題にしくなっていて、ものの性質や、空間的配置関係を捉えるものである。」(工藤 1995 : 38) と説明され、「従って、この派生的意味は脱アスペクト化していることになる。」(工藤 1995 : 38) とされており、そこから、最終的にテイタ (テイル) 形の派生的意味は上の「パーフェクト性」と「反復性」の2つであると主張されている。

(7) 昔、この辺りには川が流れていた。

工藤 (1995 : 43) は、ここまでに見た基本的意味と派生的意味を含めて、スル形、シタ形、シテイル形、シテイタ形の拡大アスペクト、テンス体系を次の表にまとめている。⁽⁴⁾

	アスペクト			
テンス	完成性	継続性	パーフェクト性	反復性
未来	スル	シテイル	シテイル	スル
現在	／	シテイル	シテイル・シタ	スル・シテイル
過去	シタ	シテイタ	シテイタ	シタ・シテイタ

(工藤 1995 : 36)

この表を見ると、テイタ形の表し得る意味で、学習者がフランス語の半過去を用いて訳した場合に問題を起こすと考えられるのは「過去・パーフェクト性」を持つ用法ではないかと思われる。上記の(5)の例がそれに当たるが、「死んでいた」で表されている出来事は従属節の述部「かけつけた」が示す時点以前に起こり、その時点で「死んでいる」という状態が「死んだ」という出来事の結果として残存していると言える。パーフェクト性を示す「死んでいた」のテイタ形は確かに、未完了性を示すフランス語の半過去を用いて和訳することはできない。また、「死ぬ」という動詞はある瞬間に遂行され、継続することができない瞬間動詞である。これはフランス語の同等の意味を持つ動詞 *mourir* にも当てはまることであり、*mourir* という動詞を(8)にあるように半過去に置いた場合、遂行途中、(く)しようとしていた)の解釈が生まれるのが普通である。⁽⁵⁾

(8) *Quand je suis arrivé à l'hôpital, mon père mourrait.*

(私が病院に着いた時、父は息を引き取ろうとしていた。)

動詞の特性によっても半過去に置かれた時の解釈は変化するということから見ても、半過去を常にテイタ形を用いて訳すことはできないことが確認できる。

日本人学習者が *pendant* と半過去を共起させた誤用を含む発話を、文脈を含めて観察し、発話の際に学習者が日本語の文章を思い浮かべていたのがテイタ形を用いた文章だったのか、そしてそのテイタ形はどのような特性を持つものと考えられるかを、次に学習者の発話の実例を分析することによって見てゆきたい。

フランス語教育における前置詞 *pendant* と時制の共起についての一考察

(9) と (10) の二例の下線部は CLJAF からの日本人学習者のフランス語での実際の発話 ((10) は質問者の発話のみ) pendant と非過去との共起を含む例である。

- (9) (…) je pensais que Paris et Montréal c'était… semblait vraiment semblait… même que Japon on devient … je devais faire la même chose comme les autres font … mais (euh) … les choses différents on ne … on n … on ne fait pas attention ce qu'ils font … on … on accepte tout ce qu'ils f … ils font … donc (euh) … moi aussi (euh) … mais d'abord co… parce que j'habitais en Japon pendant dix ans … je n'ai p … je ne pouvais pas m'habituer de faire des … des choses que je veux faire seulement des choses je faire … mais (euh) .. après six mois je pouvais faire je pouvais dire s … q … comme je veux (…).

(CLJAF' 上線と下線は同じ)

(10)

質問者 : très bien d'accord alors question numéro huit est-ce que vous avez déjà fait un séjour dans un pays francophone ?

学習者 : oui, (euh) … j'ai j'étais, non pardon … je suis je suis (mh) j'étais … (mh) j'étais à oui Grenoble … pendant un an … (éh) pour étudier le … français (mh) mais … j'étais difficile (rire) de parler le français parce au je je ne parle pas bien (rire)
(CLJAF' 上線と下線は同じ)

(9) では、学習者が子供の頃にフランス語圏に住んだ際に感じた日本とフランス語圏での他者の行いに対する人々の態度の違いやそれが自分に与えた変化について話している。この中で学習者は「j'habitais en Japon pendant dix ans」の発話で *pendant* と半過去 (*habitais*) を共起させている。この発話を発する際に学習者はおそらく「日本に10年間住んでいた。」というテイタ形の文を思い浮かべていたのではないだろうか。「(フランス語圏に行く前に) 日本に10年間住んでいたので、(他人の目を気にせず) 自分がしたいと思うことだけをするのに慣れていなかった」という文脈でこのようにテイタ形を用いて表現するのは日本語ではごく自然に思われる。そして、想定されていると想像できる日本語の発話のテイタ形は過去において継続中の出来事を表している用法ではなく、明らかに完了したと捉えられるべき出来事を提示していると言える。

(10) においては、質問者の「フランス語圏に滞在したことはあるか?」という趣旨の質問に対し、学習者は「フランス語を学ぶためにグルノーブルに1年間にいた。」と答えているが、フランス語での実際の発話で *pendant* と半過去が用いられている (*j'étais à oui Grenoble ... pendant un an*)。この発話をした時に学習者が想定していたと思われる「フランス語を学ぶためにグルノーブルに1年間にいた。」という発話の述語は「いる」という状態動詞のタ形である。このタイプの動詞にはテイル形が存在しない⁶⁾。したがって、「いる」という動詞の過去を表す形には「いた」という形しか存在せず、完了した出来事と捉えた場合も未完了と捉えた場合も「いた」を用いる (*en* 九月いっぱい実家にいた。(完了) / 彼から電話が来た時、私は家にいた。(未完了))。日本語の「いた」という形に相当するフランス語の動詞の活用形を考えると、文脈によってフランス語の複合過去 (例えば *j'ai été*) も半過去 (例えば *j'étais*) も可能である。その可能性の中で、(10) の文脈で *pendant* を含む発話を発する際に「いた」を想定しな

がら学習者がフランス語の半過去 (je t'ai vu) を選んだということは、想定した「いた」を「(日本に10年間)住んでいた」のような継続動詞(非変化動詞)の場合のテイタ形が完了を示すケースと同等であるとして捉えているのではないだろうか。以上の2例を見ると、ここで関連しているのは工藤(1995)によるテイタ形(工藤の「シテイタ」のパーフェクト性を表す用法であると言える「イタ」の場合は完成性)。

日本語を外国語として学んだことのない学習者の場合、アスペクトや時制を表す動詞の形の1つ1つの意味価値について意識をせずに日常的に自然に使っているのが普通であろう。そのため、フランス語の半過去の用法で普通最初に学習する過去における継続中の出来事を表す用法と、それを和訳する際に用いることの多いテイタ形の未完了を表す用法を同等の表現だと理解し、テイタ形を想定した時はフランス語では半過去を用いるという結びつけが出来てしまうのではないだろうか。このことから、学習者が成人の場合は、初習時に半過去の過去時制としての用法を説明する際に、半過去の和訳となることの多い日本語のテイタ形には複数の用法があり、その中には過去における継続・未完了の用法だけでなく、完了を表す用法があることを「テイタ形≡半過去」という単純な結びつけを使うと誤用になる例を提示することにより、学習者が一度意識するだけで、その後の誤用の頻度に違いが出てくるのではないかと考える。この点に関しては、三二でより詳しく考察する。

ここまでは、日本語を母語とする初習者が「テイタ形≡半過去」であると誤認してしまう傾向について考察してきたが、次に、テイタ形を用いた日本語の文をフランス語に訳す際にも類似の理由から誤用が起こる可能性について付け加えておきたい。

テイタ形は典型的には(11)に見られるように、現在において展開中の出来事を表すと言える。

(11-a) 私は去年からフランス語を勉強している。

フランス語には英語のように現在において展開中の出来事を表す現在進行形が存在せず、現在形がそれを表すことから、(11)と同等の意味を持つ日本語の発話は現在形を用いた(11-b)のようになる。

(11-b) J'étudie le français depuis l'année dernière.

過去のある時点において継続中の出来事を表す半過去の最も頻繁に出会う用法が学習者の頭に残りやすいように、日本語でテイル形を想定した際にはそれに相当する動詞の活用形としてフランス語の現在形が思い浮かぶということは学習者にとって自然なことだと考える。だが、テイタ形が過去のある時点における完了を表す場合と同様に、テイル形にも現在時における完了を示す用法があるが、使用頻度としては比較的低いと思われるため、母語話者がその用法を意識していない場合が多いと思われる。例えば、次のような発話にテイル形の完了の用法が見出せる。

(12-a) 8時10分の電車に乗ることをもう決めています。

(13-a) 母は今、外出しています。

(14-a) その状況は理解しています。

これらの発話で用いられているテイル形はそれぞれ過去のある時点で生じた出来事の結果が発話時点に残存していることが表されていると言える。例えば、(13-a) の発話によって話し手が最も伝えたいことは、過去のある時点で起こった「母が外出した」という出来事ではなく、それに伴って「母は家にいない」という状況が発話時点において認められるということである。これらの発話は、(12-b)、(13-b)、(14-b) にあるように、フランス語に訳す場合、複合過去を用いて日本語と同様発話時点における残存結果を表すべきである。

- (12-b) *J'ai déjà décidé de prendre le train de huit heure et dix.*
 (13-b) *Ma mère est sortie en ce moment.*
 (14-b) *J'ai compris cette situation.*

日本人学習者の複合過去形の誤用分析をした Hirashina (2016: 3) は、単に過去に起きた出来事を提示する用法 (PC *passé*) に対して、過去に完了し、その結果を発話時点に残す用法 (PC *accompli*) の概念化は容易ではないと述べ、(12-a)、(13-a)、(14-a) のような複合過去を選ぶべき場合に、「*Je ne décide pas.*」(日本語の「決めていない」) に相当する。正しくは「*Je n'ai pas décidé.*」のように現在形を選んでしまうことが多いことを指摘している。この場合、想定している日本語の文で選ばれているのがテイル形であるということがこの誤用を引き起こしているであろう。

ここで見たように、日本人学習者がする傾向のある「テイタ || 半過去」と類似した現象として、「テイル || 現在」

も認められることが分かった。この場合は複合過去に関してであるが、半過去の場合と同様に、複合過去を初習者に説明する際に、過去時制である複合過去も文脈によっては過去の出来事が発話時点に結果として残す状況を主に表すと解釈すべき用法があることを言及し、さらに複合過去の和訳に用いられがちな日本語の動詞の表現についても言及し、学習者が現在形の同等表現であると認識しているはずの日本語のテイル形には残存結果を表す、つまりフランス語の完了を表す複合過去と同等の価値を持つ用法があることを認識させることが誤用を避けることにつながるのではないだろうか。

二二二 フランス語の半過去について

フランス語の半過去には過去時制に留まらない数多くの用法がある。その中には過去のある時点において継続中の出来事を表す過去時制とは捉えることのできない、条件文における用法(例: Si j'étais au Japon, je viendrais t'aider tout de suite)、未遂または危機一髪の半過去と呼ばれる用法(例: Une minute de plus, le train déraillait)、愛情表現の半過去(例: Qu'il était mignon, le chienchien)、緩和表現の半過去(例: Je voulais vous demander un service)などの用法がある。この多岐に渡る用法を見ても、フランス語の半過去の理解は学習者にとって容易なものではないことが分かる。しかし、混乱や情報過多を避けるためにも、これらの半過去の用法が初習者に一度に導入されることはまずなく、まずは最も典型的で頻繁に出会う過去時制としての用法から学習するのが一般的である。

上で見たように、この一般的な用法の多くはティタ形で和訳できることから、日本語の母語話者であるためティタ形の諸用法を意識することのない学習者が「半過去⇨ティタ形」という結びつきを自然に身につけるということはあ

ると考えられる。二・一では、フランス語の時制、特に複合過去や半過去を導入する際に、日本人学習者にも日本語のテイル／テイタ形の残存結果を表す完了の用法があることを言及することにより、日本語の動詞表現の特性を意識することを促すことが効果を生むのではないかと述べた。ここではさらに、フランス語文法での学習者への半過去の説明方法について検討し、誤用を避けるより効果的な導入、説明について考察してゆきたい。

半過去の用法の中で初習者が初めに学習する(3)に見られるような最も一般的な用法は、過去における出来事とその継続中の姿を捉えて未完了として提示するというように説明されることが多いが、「未完了の」出来事という表現が理解しにくいことがあると考える。つまり、未完了を「始められたが終わりまで遂行されなかった」と捉えるのと、例えば「100メートル走る」や「円を描く」のように終点に達さなければ遂行されたことにならない達成を表す動詞句 (Vendler (1967) の動詞分類における *accomplishment*) の場合、達成前の段階で行為を中断した時に未完了と捉えることができるが、「食べる」や「寝る」のような活動を表す動詞句 (Vendler (1967) における *activity*) の場合はその行為が一旦始まってしまえば、どの時点で行為が止まったということになるので、何を未完了と理解すればよいのかに迷うこともあるのではないだろうか。この場合、学習者によっては、動詞自体が表している出来事(行為や状態)と発話で時制を用いて表されている出来事の区別をすることが難しいということもあるだろう。時制によって、動詞自体が表す出来事の切り取り方が違うということを学習者に理解してもらうことが重要であると考えられる。

出来事の「始点」と「終点」という概念を使って、半過去が動詞の表す出来事を独自のやり方で表していることを説明する場合も多い。例えば、東郷 (2019: 71-72) は、「半過去は、過去のある時点において継続・展開中の出来事

や状態を表す。単純過去形や複合過去形に置かれた動詞や時の副詞が基準点となる時点を示すことが多い」とした後に、単純過去、複合過去と比較しながら、「単純過去形・複合過去形が出来事の開始から終点までを表すのにたいして、半過去形は出来事の開始と終点を含まず、ある時点において展開中の出来事を表す」と説明している。

これはフランス語の時制の理解に「視点」または「基準点」という概念を用いる多くの研究者が取ってきた考え方につながる。Reichenbach (1947) は異なる時制を説明するために発話時点 (speech point (S))、出来事の時点 (event point (E)) と共に基準点 (reference point (R)) という時間に関する概念を導入した。このうちの R (基準点) が本論で「視点」と呼ぶ時間軸上の時点に相当するものである。Reichenbach は、各時制はそれぞれこの3つの時点の関係性において異なっており、それをもって説明することができるとしている。例えば、半過去と単純過去は、Reichenbach が導入した上の3つの時点に関しては、同じ関係性を持っている。つまり、E と R が同時で、S はこれら2つの時点に時間的に先行している。そして、半過去と単純過去の違いは、下の図が示すように、単純過去がもたらす E が点的であると見なされるのに対し、半過去のそれは広がりを持つ線的なものであると見なされるという点である。



(Reichenbach, 1947 : 290)

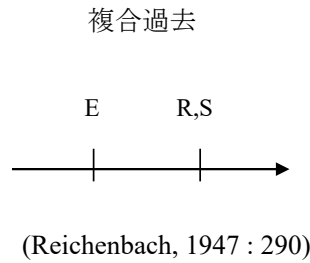
Kamp & Rohrer (1983) は Reichenbach (1947) の導入した S、E、R の時点を用いて主に単純過去と半過去の相違点を論じ、その後の数多くの研究の出発点となる重要な説を唱えた。Kamp & Rohrer は、単純過去と半過去の違いは、単純過去が時間軸上の E と同時点に自ら新たな R を導入するのに対し、半過去は先行する文脈内で導入されている既存の R を採用する点にあると主張する。半過去の特性は次のように説明されている。

- (I) *l'énoncé à l'imparfait introduit un nouvel état discursif s ;*
- (II) *l'état s se situe antérieurement au point d'énonciation ;*
- (III) *s contient le dernier événement e (introduit par un énoncé au passé simple) .*

(Kamp & Rohrer 1983 : 253)

ここままで示されてきたように、出来事の中にはある一瞬で遂行される性質を持つもの（瞬間動詞の表す出来事）があるが、それ以外のタイプの出来事・状態に関しては、始点と終点を含まない展開中の姿を捉えるということとは、その出来事や状態自体に由来しているものではなく、その展開中の姿を捉える視点、つまり、始点と終点の間のどこかの時点に位置している視点が想定されているということなのである。また、フランス語で文を作る場合、学習者が半過去との間で迷うことがよくあると考えられる複合過去は、基準点 (R) と発話時点 (S)、出来事時点 (E) との関係性は単純過去とは異なったものとなる。すなわち、現代フランス語ではほぼ文語でしか用いられない単純過去と異なり、会話体で多く使われる複合過去の場合は、基準点 (R) は発話時点と同時に置かれるのである。これを

Reichenbach (1947) は次のような図で示している。



この図が示すように、複合過去は発話時点より過去に生じた出来事や状態を現在時点に視点を置いて見ているということから、出来事または状態は完了したものと捉えられているということが理解できる。上の半過去を表す図との相違、つまり時間軸上の視点の位置が異なることを理解できれば、たとえ同一の出来事または状態が問題になっても半過去を用いた時は展開中の姿が捉えられ、複合過去を用いた時は完了した姿が捉えられるということを理解しやすくなるのではないだろうか。

ここで見たような方法で、各時制が定める視点または基準点が時間軸上のどこに置かれているか、そして動詞が表す出来事・状態とどのような関係にあるかは、抽象的な考え方ではあるが、特に大学生レベルの学習者に示すのであれば複雑または難解すぎるといえるのではないかと考える。また、それと同時に、学習者自身が「半過去⇨テイタ形」という結びつけを生み出してしまわないように、上の二・一で見たように、日本語のテイタ形は必ずしも出来事の過

去における継続を示す動詞の形ではなく、完了を示すことも普通にあるということを描すれば、日本語話者の学習者はそれを認識し、その結果、自身が日本語でテイタ形を用いるであろう場合に半過去を用いてフランス語訳すると誤用になってしまう場合があるということを認識できるようになると考える。半過去の他の用法に手を広げると、より複雑な問題が出てくるため、このような単純な説明では不足してくるだろうが、少なくとも初習者が早い段階で学習する半過去の最も一般的な用法については、有用ではないだろうか。

三. 「pendant + 時制」の正しい理解のために

二. で述べた半過去の時間的用法の理解を踏まえて、三. では本論の中心的なテーマである「pendant + 時制」の組み合わせの正しい理解方法について論じてゆく。

pendant という前置詞が時間 (*une heure, trois mois* など) または一定の期間を含意する表現 (*mon enfance, la guerre*) を伴って表しているのは、文の述部が表す出来事が継続した期間に相当する時間軸上のある時点からある別の時点までを切り取った期間である。二. までに観察した *pendant* と複合過去を用いたタイプの文 (例: *Il a habité au Japon pendant un an.*) つまり日本語の「〜の間(ずっと)」という表現に相当するケースについて言えば、*pendant* は始点から終点までを含む完了として捉えられた複合過去や単純過去などが表す出来事の継続期間を表しているのだ。この場合においては、時間軸上のある一定の期間を切り取るという *pendant* の特性と複合過去や単純過去などの完了時制の「出来事を始点と終点を含む完了した姿で捉える」という特性はうまく合致することが分か

り、反対に半過去の「始点も終点も含まない出来事の提示法」とは相入れないことが理解できる。学習者には二で見たように、各過去時制の出来事時点・発話時点と視点（基準点）の時間軸上の位置の違いを説明し、さらに日本語のテイタ形が何を表すのかを認識させた上で、pendantのこの特性を説明すれば、自然に「pendant + 半過去」は誤用であるということを理解できるのではないだろうか。

次に、ここまで扱ってこなかった pendant の第二の用法について考察しよう。上の (9) と (10) に挙げた学習者の実際の誤用例はどちらも「pendant + 時間 (dix ans, un an)」の例であるが、pendant の二つ目の用法は「pendant + 期間」である。この用法では、1つ目の用法が時間の表現を表す時間の幅の間ずっと出来事が継続したことを表すのに対して、ある期間のうちの一部において起こった出来事を表す。阿部 (1991: 43) は、pendant の1つ目の用法の例として (15) を、2つ目の用法の例として (16) を挙げ、Vet (1980: 117-118) を引用しつつ、(15) は「5時間のあいだ眠った」、つまり全面的解釈になるのに対し、(16) は必ずしも全面的解釈にならず、「眠ったのは会議の間の一部の時間」という解釈になると述べている。

(15) Jacques a dormi pendant deux heures.

(16) Jacques a dormi pendant la réunion.

(16) の発話は「会議の間ずっと寝ていた」ではなく、「会議の間の一部の時間に寝ていた」という解釈が可能であるということである。このケースにおいては、pendant が切り取るのは1つ目の用法に見られた動詞が表す出来

フランス語教育における前置詞 pendant と時制の共起についての一考察

事・状態の始点から終点までの期間ではなく、出来事の期間を含む、より幅のある期間である。この違いはあるが、出来事はやはり発話時点と重なる基準点から見えて完了したものと捉えられることから、1つ目の用法と同様に、半過去と共起させると誤用となる。

別のタイプの動詞、例えば *chanter une chanson* や *naître* を用い、さらに期間を表す表現も一般的に出来事が続くまたは起こる時間の幅より長い期間を表すものを用いると、2つ目の用法の解釈のみが採用される。

(17) Ils ont chanté une chanson pendant la soirée.

(18) Ma sœur est née pendant notre séjour au Québec.

(17) では、「歌を一曲歌う」という出来事はその行為がその終点(その曲の終わりまで歌い終えた時点)に達してはじめて遂行したとみなされるので、それが夜のパーティーの間ずっと続くことはあり得ず、(18) では *naître* (生まれる) という瞬間動詞はある一瞬で遂行される出来事を表すので、ケベックで過ごした年と同じだけ長く続くということはありませんからである。ここで見たように、一定の期間を含意する表現と共起した時に、(16) の *dormir* のような動作動詞 (*Vender* の動詞分類の *activities*) はその期間の間ずっと継続したという解釈を、(17)、(18) にもそのような達成動詞 (*Vender* の動詞分類の *accomplishment*) や到達動詞 (*Vender* の動詞分類の *achievement*) と共起すると動詞が表す出来事をその期間内に内包するという解釈が得られることが分かる。また1つ目の用法である時間の表現 (*un an*、*trois heures* など) と共に *pendant* が用いられる場合には、発話で表されている出来事はそれが

表す期間の間ずっと継続したと解釈されるわけだが、その理由から達成動詞や到達動詞のようなある一瞬で遂行される出来事を表す動詞とは相入ることができない。動詞の種類と pendant の1つ目、そして2つ目の用法との共起の可能性に関して、デュベール (2019) は、阿部 (1991) の分析をもとに次の表を提示する。

“pendant”	状態動詞	動作動詞	到達動詞	達成動詞
+ 時間量	○	○	×	×
+ 期間名	○	○	○	○

(デュベール 2019: 7)

そして、デュベール (2019) は日本人学習者に実施した pendant と異なる時間の表現または期間の表現を組み合わせたものを与え、それらを用いて自由に作文させるというアンケートを実施し、その結果と上記の表が表すことを踏まえ、「pendant を用いた過去時制の教授法」を次の4ステップを用いて提案する。

- (1) 動詞を4カテゴリーに分類することを意識させる
 - (2) pendant + 時間量または pendant + 期間名の区分をつける
 - (3) 動詞の4分類と2種類の pendant の組み合わせを見つける
 - (4) 例文に取り組む
- (デュベール 2019: 11)

フランス語教育における前置詞 pendant と時制の共起についての一考察

デュベール (2019) の提案した教授法は、pendant を用いて日本人学習者に正しい過去時制の用い方を教授することが目的であるので、pendant を用いた発話で過去時制を誤用しないことを理解させることを目的とする本論とは異なる部分があるのは確かだが、最終的に学習者に求めるのは正しい時制を持った pendant を含む発話であるので、目的は近いと言えるだろう。デュベール (2019) の上記の提案については、pendant と適切な時制 (出来事の完了を表す時制) の組み合わせを理解するという点からは、初習者にとっては少し複雑ではないかと考える。上記の (1) については、4 つのカテゴリーの動詞を意識することは、上の表で表されているように、「pendant + 時間量」の用法とは (3) の点に記されていることにつながるということだと思われるが、例えば、到達動詞や達成動詞が表すようなある瞬間に遂行される出来事がある程度の時間の幅を持った期間を表す表現 (上記の表で「時間量」と表されている表現) と共起させることができない (例えば *Je suis tombé pendant trois heures* が意味の上で不可能であるというように) ことは、動詞のカテゴリー分けと pendant の用法の組み合わせを意識せずとも、自ずと理解できるのではないだろうか。つまり、同様のことは「私は3時間転びました。」という文が成り立たないことから容易に分かるように、日本語にも当てはまるので、学習者にとってはフランス語独特の困難点とは感じられないと考える。このことから、pendant と時制の正しい共起を理解するという目的からは動詞の4つのカテゴリー分けを理解するという学習者にとって多少とも煩雑なステップは必要ではないと言えるのではないだろうか。フランス語などの外国語におけるある要素を母国語やすでに習得している他の言語のそれに相当するように見える要素との関連で理解することには多くの弊害があることは想像できるが、この場合に関しては、学習者の母語であるまたは学習者が習得している日本語

の特性（例えば「テイタ形は必ずしも未完了を表すわけではない」のような）を意識させ、さらに pendant が完了を表す述語動詞と共起することを pendant の「時間軸上のある時点からある時点までを切り取って提示するもので、未完了の姿で捉えられた出来事が継続した期間の一部を切り取る機能はない」という性質とともに説明した方が容易ではないかと考える。このことは、日本語をベースにフランス語で用いる語や文法的要素を選択すべきではないというより一般的なことの理解につながるのではないだろうか。

ここまで、本論の中心的なテーマとして、CLJAFに見られた日本人学習者の pendant と時制の組み合わせに関する実際の誤用に基づき、pendant と半過去を共起させるといふ典型的な誤用の理由、そしてそれを防ぐために学習者が理解すべきことについて論じてきたが、最後に、他の時制に関連して、日本人学習者がする傾向があると思われる別のタイプの前置詞の混乱に基づく誤用について見てゆきたい。

日本語では「来月からフランスに3カ月の間滞在する予定です。」や「今から1時間間勉強しなさい。」などのように、未来のことに關する出来事を表すル形を用いた発話や命令文に「～の間、～間」を用いることができる。このタイプの日本語の文を学習者が単純に「～間 ≡ pendant」と考えると、例えば「私は来月3カ月間の予定でフランスに行きます。」とらう文を仏訳して「*Je partirai pour la France pendant 3 mois le mois prochain.」というフランス語の文を作ってしまうことが容易に想像できる。しかし、フランス語では未来を表す時制と時間の表現と結びついた pendant の共起は正しくない。ここでは pendant ではなく予定の期間を表す用法を持つ前置詞 pour を使うべきなのだ。pour は、上の例文でのように発話者の現在から見た未来における予定の期間を示すだけではなく、「Au départ, j'ai été engagé pour trois mois.」のように過去において予定されていた期間も示すことが分かる。一方で「pendant

+ 期間を表す表現」の場合は、例えば「Je rendrai visite à ma grand-mère pendant les vacances d'été.」のように未来において行われるであろう出来事を含む特定の期間を *pendant* を用いて表すことが出来る。この点では、日本語の「(時間を表す表現) 間、の 間」に相当する1つ目の用法は、「出来事が実現される予定の期間」を表す場合 *pendant* は用いられず *pour* を用いるべきで、日本語の「(期間を表す表現) の間に」に相当する2つ目の用法には *pendant* を用いることができることから、初習者は複雑だと感じる可能性があるだろう。ここで見た「出来事が実現される予定の期間」を表す時に日本語では「(間、の 間)」を使うにもかかわらず、フランス語では *pendant* を使わず *pour* を使うという点も、フランス語の前置詞を選ぶ際に日本語の表現を思い浮かべて、*pendant* を選ぶと誤用になってしまうケースの一つである。つまり、この *pour* と *pendant* の混乱も、日本語を母語レベルで話す学習者が *pendant* の使用を日本語の「(間、の 間)」の使用と同一視してしまうことによって起こりうる誤用である。*pour* も *pendant* と同様に学習の比較的早い段階で導入されることの多い前置詞であるが、用法が複数あるため、実は理解が容易ではない面もあると言える。本論では *pour* は主な議論の対象にはしないが、*pour* が用いられるべき場合に誤って選んでしまうことのある *pendant* についても、*pendant* の導入時に教員が *pendant* と「(間、の 間)」が常に同等ではないことを *pour* を用いた例を挙げながら言及することによって学習者の注意を喚起すると誤用を避けやすくなるのではないかと考える。

おわりに

本論では、CLJAFに見られる前置詞 *pendant* と半過去を組み合わせるといふ誤用を日本人学習者がする傾向のある一般的なものと捉え、この問題が *pendant* と日本語の「～間、～の間」といふ表現を同一視してしまうという点から生じているのではないかと考えた。そして、*pendant* と「～間、～の間」と共起可能な両言語の時制について考察し、そこからこの誤用の理由を明らかにし、さらに誤用を学習者に避けさせるために教員がどのような教授法を採用すべきかということを考察した。

pendant は未完了アスペクトを表す半過去の用法と共起できないのだが、日本語では「～間、～の間」はテイタ形と共起できることから、学習者が「*pendant* + 半過去」という組み合わせを選ぶ傾向があると考える。つまり、*pendant* と「～間、～の間」の特性を同じものであると考えてしまうと同時にフランス語の半過去と日本語のテイタ形が同等であると理解してしまうということが起こるのである。

pendant が用いられる環境を観察して、日本語の類似表現と結びつけて考えるだけでは捉えきれない時制との共起に制約があることが分かったが、*pendant* と類似した面を持つ他の前置詞の特性を考察することによって、今回の考察がさらに広いフランス語の時間や期間を表す前置詞の日本人学習者による理解を促すことにつながるのではないかと考える。時間的に限定するという前置詞の性質を考えると、フランス語の *pendant* と日本語の「～間、～の間」の間で観察できたことが、例えば *jusqu'à* (または *jusqu'adors*, *jusque tard dans la nuit* など) や「[de... à...]」(時間

的に「〜から〜まで」の意で）など時間軸上にある出来事・状態の継続期間の終点、または始点と終点を明示する表現についても学習者に同様の方法で理解を促すことができるのではないだろうか。以下は日本人学習者の *jusqu'à* を用いた発話の例である。

- (19) (...) du début de novembre de début novembre jusqu'à la fin du mois de décembre - ... - j'étais en France - ...
(<http://www.clijaf.com>)

発話者である学習者は「11月初めから12月の終わりまでフランスにいた。」という内容を伝えようとしているが、「de... jusqu'à...」（〜から〜まで）という表現の後に述部で半過去を用いている (*j'étais en France*)。de がフランス滞在の始点を、*jusqu'à* が終点を示すわけだが、この表現を用いる場合は、特定の時間の幅を切り取り明示する機能のある *pendant* と同様に、それを含む発話の時制も完了を表す複合過去を選ぶべきである。この場合も、(20) が示すように、日本語では「〜まで」という出来事・状態の終点を示す表現が発話の中でテイタ形とも共起できるといふことからフランス語で半過去を選んでいるのではないかと考える。

- (20) 前日は夕方ぎりぎりまで練習していた。(恩田陸、『蜂蜜と遠雷』)

このように、時間軸上のある時間の幅を切り取ったり、出来事や状況の終点を示したりする機能をもつ前置詞に本

論での日本人学習者が誤用する傾向のある「Pendant + 時制」の組み合わせに関するものと同様の考察が当てはまる。日本語のタ形／テイタ形を完了／未完了と単純に置き換えることや、日本語の「〜間、〜の間」や「〜まで」とテイタ形の共起を *pendant* や *jusqu'à* と半過去形の共起に置き換えることは出来ないかと理解することによって、学習者は日本語の表現をフランス語の表現と同等のものと考えてしまうというより一般的な傾向に気づき、それぞれの言語の表現には類似したように見える表現があっても、それぞれが独自の特性を持つことがあるということを意識できるのではないだろうか。

外国語の学習においては学習者の母語を使わずターゲットの外国語のみを用いる教授法もあるように、学習者の母語を介入することは混乱を招いたり、理解を遠回りさせたりすることもあるだろう。ただ、今回の *pendant* と時制の共起に関する問題のように、学習者が母語における表現と外国語における表現を誤って結びつけて考えてしまうことに誤用が起因するような場合は、母語における表現についても正しい理解を促し、その上で外国語の表現の特性を知ることは学習者にとって誤用を避けるために有益なのではないだろうか。

注

- (1) 本研究は科研費 (20 H1291) の助成を受けたものである。
- (2) CLJAF (Corpus Longitudinal Interphonologique de Japonais Apprenants le Français' <http://ns3065906.jp-51-255-78.eu8887/accounts/login/?next=/>) はフランス語を学ぶ日本人大学生のフランス語における発語を集めたコーパスで、科研費 (23320121 & 15 H03227) の助成を受けて作成されたものである。
- (3) 例えば東郷 (2019: 72) は、半過去の一般的な用法を「半過去形は出来事の開始と終了を含まず、ある時点において展開

フランス語教育における前置詞 *pendant* と時制の共起についての一考察

フランス語教育における前置詞 *pendant* と時制の共起についての一考察

中の出来事を表す。」と説明しており、日本語の特定の動詞の形に結びつけた説明はしていない。

(4) 工藤は実際にはこの表にスル形とシタ形の〈モーダルな用法〉(知覚的現在、心理的現在、発見・想起、差し迫った要求)とシテル形とシテイタ形の〈単なる状態〉(脱アスペクト用法)、恒常的特性(脱アスペクト・テンス用法)を付け足して表しているが、ここでは省略する。

(5) 主に文学作品で用いられ、一般的な半過去とは異なる解釈を受ける用法に絵画的半過去や語りの半過去と呼ばれる用法があるが、この場合は瞬間動詞が半過去に置かれた場合でも、特に共起する時間的副詞の意味によって、物語世界において完了した出来事と捉えられる場合もある。

À quinze ans, enfin, on la maria. Deux ans plus tard, son mari mourait poitrine.

(Maupassant, *Gde. L'enfant*, Contes et nouvelles*)

(6) 工藤 (1995: 44) はシテル形式 (本論のテイル形) のない「ある・いる」のような時間的展開を持たない動詞を * 静態動詞 (static verb) と呼ぶ³⁶。

参考文献

- 阿部宏 (1991)、「pendant に ついて」、『フランス語学研究』第25号、p.43-50。
- 工藤真由美 (1995)、「アスペクト・テンス体系——現代日本語の時間の表現——」、ひつじ書房。
- 庵功雄 (2001)、「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」、『一橋大学留学生センター紀要』第4号、pp.75-94。一橋大学。
- デューベル タヴィ (2019)、「日本語母語話者における pendant を用いた過去時制の使用について」、『日本フランス語フランス文学会中部支部研究報告集』第43号、1-13。
- 東郷雄二 (2019)、『フランス文法総まとめ』、理想社。
- Kamp H. & Rohrer Ch. (1983), "Tense in text", in Bauerle R, Schwarze C. & Von Stechow A. (ed.), *Meaning, Use and Interpretation of Language*, Berlin : New York, De Gruyter, 251-269.

- Hirashina R. (2016), "Une analyse d'erreurs sur la valeur d'accompli du passé composé et quelques réflexions sur l'interlangue du système verbal du français chez des apprenants japonais", 『関西大学外国語学部紀要』第15号, 1-19.
- Reichenbach H. (1947), *Elements of Symbolic Logic*. New York: Free Press.
- Vendler Z. (1967), *Linguistics in Philosophy*, Ithaca, Cornell University Press.
- Vet C. (1980), *Temps, aspects et adverbies de temps en français contemporain*, Genève, Droz.